

「ステラ、結婚しよう！」

「嫌です」

もう何度目かもわからない求婚を、本を整理する手を止めることなくすつぱりと切り捨てる。

閉館後の図書館には、私と彼しかない。静かな図書館の中で、私が本を移動させる物音だけが静かに響いていた。

1

やがて、ギツと椅子が軋む音がして、私はちらりと横目で確かめる。

椅子を反対向きにまたいで腰掛けたレオン様が、こちらを眺めていた。求婚を断られたはずなのに、全く気にするそぶりも見えなかった。むしろ、楽しそうにすら見える。

意思の強そうなサファイアの瞳、高い鼻梁、薄く形が良い唇が緩やかに弧を描いている。グラント領の領主の証とも言われるシルバーの髪が、窓から差し込

む月の光を受けてさらりと揺れた。

彼はこのグランツ領を治める伯爵だ。若くして爵位を継いだが、その手腕は確かで、領民からの信頼は厚い。五年前に彼が地位を受け継いでから、グランツ領は目に見える形で豊かになった。道が整備され、孤児院に食事が届くようになり、そしてこの図書館が建った。

文化がなければ人は育たない、というのが彼の持論らしい。司書を目指していた私がその噂を聞きつけて、他の領地からわざわざこのグランツ領に移り住んできたのだから、その判断には心から感謝している。

——だけどなぜか。なぜか、その伯爵様は私のことをいたく気に入ったらしく、こうしてたびたび求婚されているのである。

毎回こうして、きつぱりと断り続けているのだが、この伯爵様はなかなかに諦めてくれない。何回私が断つても、傷ついた様子もなく、気まずそうにするでも

なく、何度も何度もこうして図書館に足を運んでくる。

（……まったく、懲りない方よね）

呆れているのか感心しているのか、自分でもよくわからないまま、本の整理を終えて一つ息を吐き出す。わざわざこんな夜遅くに足を運んでくださった領主様を、これ以上無視するわけにもいかない。

私は仕方なく、熱心にこちらを見つめ続けるレオン様に視線を向けた。

「……今日はどんな本をお読みになりますか？」

私と目が合うと、レオン様はサファイアの瞳を細めて微笑んだ。待つてましたと言わんばかりの顔だ。

「終わったのか、お疲れ様。今日はな——」

レオン様は立ち上がって、私がいる書棚まで向かってきた。私より頭一つ以上高いその体躯が、ずっと書棚との間に入り込んでくる。逃げ場がなくなつた

と思つた瞬間、手が伸びてきた。

（え……!? こ、これってまさか——）

見たことある場面だ、と心臓がドクンと跳ねる。私が大好きな小説の、あの場面——。

思わずぎゅつと目を閉じると、頭上から声が降ってきた。

「——これを読みたいと思つてな」

私の頭の斜め上から、一冊の本が取り出される音がした。

「え、あ……？ は、はい……！」

差し出された本を見て、私はひどい勘違いをしていたことに気づいた。ぽかんと口を開ける私に、彼はにやりと笑う。

「どうしたんだ、ステラ？」

「……なつ、なんでもありません！」

慌ててそつぽを向く。まだ心臓がうるさい。レオン様はそんな私を見て肩を揺らして笑っていた。まったく、人が悪い。

気を取り直して彼が選んだ本を確認する。戦時下を生き延びたとある兄弟の数奇な人生を描いた、知る人ぞ知る傑作だ。

「あ、これすごく面白かったですよ！特に後半、兄が弟の選択を黙って見守る部分があるんですが——きつとレオン様も好きだと思います」

「それなら今回はこれにしよう。ステラがそう言うなら間違いないからな。……そういえばこの前勧めてもらった冒険譚も、結局最後まで一気に読んでしまった。読み終わった後もしばらく、あの旅の空気が頭から離れなかった」

「ほんとですか!? ああ、旅の途中で仲間が増えるたびに、全員の関係性が変わっていくのが絶妙なんですよ！主人公たちが少しずつ信頼を積み重ねていく姿が本当に好きで——」

そこまで言つたところで、口元に手を置く。

（う……っ、また話しすぎちゃった）

レオン様も本が好きで、こうして本を読んでは感想を私に伝えてくれる。だからこそ、私も彼が相手だと、ついつい止まらなくなってしまう。

「もつと話してくれてよかったのに。本について語るお前は楽しそうで、いい」
「……話しすぎではないですか」

「そんなことはない。むしろ、領民にももつと本の話を広めてほしいくらいだ」
それは私も同じ気持ちだった。この前の子ども向けの読み聞かせの会も、レオン様が場所と予算を用意してくれたおかげで実現できた。子どもにもつと本に触れる機会を増やしてあげたいという私の要望を、彼がすぐに形にしてくれたのだ。彼は、一平民の意見をいつも真面目に取り合い、そして実現に向けてすぐに行動してくれる。

すぐに私に求婚してくるところは困ったものだけれど、こういうところは、領主として、人間として心から尊敬している。

結局その後は深夜まで、図書館の今後の運営や孤児院への本の貸し出し制度について話し込んだ。レオン様は私の話をよく聞いて、時々鋭い質問を返してくる。この土地をよくしたいという気持ちだが、言葉の端々に滲んでいた。

「もうこんな時間、か。私も早く帰らないと」

私は図書館の中央に設置された大きな時計をちらりと見やる。

レオン様と熱く語り合った後、図書館を出る彼を見送ったところだった。

私を家まで送りたいと言われたけれど、多忙な領主である彼に送ってもらうのは申し訳なくて、その申し出は今日も固辞した。求婚されているとはいえ恋

人ではないのだから、なおさらだ。

大きく息を吐きながら、先ほどのやりとりを反芻する。

(……それにしても、あのとき)

レオン様と書棚の間に追い詰められて、逃げ場をなくしたあの瞬間。

脳裏にある情景が重なって、私はほとんど反射的に書棚の奥へと向かっていった。迷いなく手を伸ばして、一冊の本を引き抜く。淡い色合いの表紙に、絡み合う花のつるが描かれた、少し古い恋愛小説だ。

パラパラとページをめくって——あった。

「……そうそう、ここなのよね」

結ばれない運命だと悟ったお姫様が、王子様の元から離れようとする。それを察した王子が、薄明かりの差し込む回廊で、お姫様の退路を塞ぐように壁に手をつく、あの場面。彼女が息を呑んで見上げる先に、熱い視線で彼女を見つめ

る王子の顔がある——読むたびに胸が締めつけられる、私の一番好きな胸キュンシーンだった。

「何回読んでも最高だわ……」

思わずほうとため息をついて、ぶつぶつと呟く。柱の陰に座り込んで、足を小さくパタパタさせながら、ひとりであうとりする。

「この小説の王子様より、レオン様の方が背が高いのかしら。このシーンで感じる以上に、さっきの方がなんだか包まれてる感が強かったというか。……つて、何を比べてるの、私」

物語の世界と現実の彼を重ねてしまっていることに気づいて、ぱたんと本を閉じた。

——そう、私は何を隠そう、恋愛小説が大好きなのだ。

昔から本を読むことが大好きで、とりわけ恋愛小説には並々ならぬ情熱を

持っていた。そのせいで理想だけが高くなつていき、現実の恋愛には、どうにも踏み出せないまま今日まで来てしまった。

「やっぱりこの先生が書く物語は格別だわ……。実際に壁際に押し付けられると逃げ場がなくなつてドキドキしちゃうのね」

はあ、と幸せなため息をついて、小説を胸で抱きしめた。

レオン様は、私が恋愛小説をこれほど愛読しているとは知らないだろう。私が彼に薦めるのは、いつも冒険譚や硬派な文学小説ばかりだった。求婚されている身で、恋愛小説を薦めるのはなんだか恥ずかしい。恋愛に興味があるのだと知られてしまいそうで。

(……それとこれとはまた別なのよね。小説は小説、現実(じつ)は現実よ)

そう自分に言い聞かせてから、明日の用事を思い出す。実家に顔を出さなければいけないのだ。

先日、母からたまには帰ってきてと手紙が来ていた。大方最近の話を聞いてほしいんだろうけれど、母の話はいつも長くて、私は少し苦手だった。

「……まあ、別に長居する必要はないのだし。さつと行って、すぐに帰ってきましょう」

私は、お守り代わりに淡い色合いの表紙のその本を鞆にしまって、図書館を後にしたのだった。



馬車で揺られること数時間、私はグランツ領からふた山越えた辺境の街へと戻っていた。

石畳の細い路地を抜けると、見慣れた一角に出る。隣家とびつたり肩を寄せ

合うように建つ、こぢんまりとした白壁の家。窓辺にはいつも季節の花が飾られていたのに、今日は見慣れない深紅のバラが揺れていた。

（……うーん、やつぱりそういうことよね）

その飾られている花の変化だけで、母がなぜ私を呼んだのか察してしまう。思わず、玄関の前でノックしようとした手が宙に止まった。コンコン、と叩く前に、内側からドアが勢いよく開く。

「ステラ!! もう、着いたならすぐに言つてちょうだいよお。ほら、入つて入つて!!」

「お、お母さん……! ちよつ、引つ張らないでつてば」

腕を掴まれ、勢いそのままに玄関をくぐる。母はいつもこうだ。嵐みたいな人だと思ひながら、私は室内を見回した。

前に来たときとは、また部屋の様子が変わっていた。あのときは淡い色調で

統一されていたのに、今は深みのある赤やブラウンが増えている。飾られた小物も、壁に掛かった絵も、どこか男性的な趣味の香りがした。棚の上に見慣れない豆を挽く道具が鎮座している。どつしりとした、いかにも本格的なやつだ。

母はそそくさとキッチンに向かった。

「今コーヒーを淹れるわね。ちよつと待っていてちょうだい」

「……ありがとう、お母さん」

確か前に来たときは紅茶に凝っていて、この茶葉がどうだ、茶器がどうだ在意気揚々と語っていた。今の恋人はおそらくコーヒー派なんだろう。

新調されらしいふかふかのソファに腰を落ち着けて、キッチンで支度をする母を眺める。彼女は鼻歌を歌いながら、慣れた手つきでお湯を沸かして、丁寧にコーヒーを淹れている。

前は腰につくくらい長かった髪の毛が、今は肩のあたりで綺麗に切り揃えられている。耳にかけた髪の毛の隙間から、赤い宝石のピアスがきらりと光った。その背中だけ見ていると、なんだか若々しくて、私とそう歳が変わらないようにも見える。

母が満足そうな顔でコーヒーを手に戻ってきた。受け取って、湯気の立つそれを一口含む。

「……深煎りのコーヒー、美味しいね」

その一言で、母の目がぱつと輝いた。

「あなたにもこの良さがわかる……!? やつぱりコーヒーは深煎りじゃなくちゃね。……ふふ、淹れ方を教えてもらったのよ」

母が、頬を染めて恋する少女のような顔をする。私はコーヒーに視線を落としながら、彼女が明らかに聞かれたがっているの、聞いてあげた。

「……誰に？」

「恋人に、よ！ 彼ね、コーヒー淹れるのがとっても上手なの。私も教えてもらううちに、彼ほどじゃないけど、だいぶ美味しく淹れられるようになったのよ。最近なんて、自分で淹れるより私が淹れたコーヒーの方が美味しいとまで言ってくれて——」

「……お母さんが楽しそうなら、よかった」

話し続ける母に、口元だけで微笑んだ。まあ、実際のところ嘘ではない。母が私を実家に呼ぶときは、決まって新しい恋人の惚気話をしたいときか、別れた後に慰めてほしいときかのどちらかだ。泣かれるよりも、こうやって楽しそうな母を見ている方が幾分気が楽だ。

ちなみに、父親は私が幼い頃に出ていったきりで、私は顔も覚えていない。昔から、何度も恋をしては別れを繰り返す母親には子どもながらに思うところ

があつたけれど、紆余曲折ありながらも私をここまで育ててくれた母には感謝している。だからこそ、時々こうやって気乗りはしないながらも実家に顔を出すのだ。

ひとしきり新たな恋人の好きなのところについて語り終えると、母は急に話の矛先を私に向けた。

「ねえ、ステラ。最近どう？　仕事ばかりしてるって聞いてるけど、浮いた話の一つもないの？」

「えっ」

その瞬間、脳裏に一人の男性の顔が浮かんた。

印象的なシルバーヘアに、サファイアの瞳。昨夜の図書館で、書棚の間に追い詰められたときの大きな身体、頭上から降り注ぐ声。あの感覚が――。

そこまで思い出したところで、慌てて打ち消す。

(……どうして今、レオン様の顔が)

毎日のように求婚されているのだから、条件反射みたいなものだ。そう自分に言い聞かせてみたけれど、胸の奥で何かが燦る。

「……今は仕事が楽しいから。恋愛してる余裕がないの」

本当のことを言えば、あなたが恋にひたむきな姿をずっと見てきたからこそ、私はそうはなれないと思ってしまう——と、喉元まで出かかつて、飲み込んだ。そう言ったところで、今まさに恋の渦中にいる母にそんなことを言った日には、恋愛がいかに素晴らしいかを延々と語られるだけだとわかっていたから。昔、一度だけそれに近いことを言いかけて、懲りていた。

小説の中のような美しい恋は、現実には存在しない。私は物語の中のお姫様ではなく、本が大好きなだけの司書だし、そんな私に白馬の王子様は現れない。

母のように恋に夢中になる日が、自分にも来るとは思えなかった。

「もう、またそんなこと言つて！……つて、もうこんな時間！そろそろビーフシチューを煮込み始めないと、夕食に間に合わなくなつちゃう」

夕食よりはだいぶ早い時間だったけれど、母はパタパタと動き始めた。

（恋人のために毎回……、今回の恋人は随分食にこだわる人なのかしら）

甲斐甲斐しい後ろ姿に、呆れながらも、だけど自分はある程度はなれないという一種の羨望がじわりと滲む。

「……じゃあ、私もそろそろ帰るわ。その恋人さんにも、よろしく伝えてください」

「ええ！またいつでも来てちょうだいね」

次に会うときに、母が泣いていないといいなと思ひながら、私は実家を後にしたのだった。



グランツ領にある自宅に戻ったときには、すっかり夜になっていた。

着替えもそこに、気づいたら外に出ていた。足が勝手に向かった先は、やはり図書館だった。恋をする母の姿を見て、言いようのない感情が胸の底にじくじくと残っていた。今は少しでも心を落ち着けたい。

図書館の扉は閉まっていた。今日お願いしていた職員は、もう帰った後らしい。スペアキーを使って扉を開けると、静まりかえった館内に、私一人の足音だけが響いた。

「ふうー……」

長い息を吐いてから、大きく息を吸い込む。古い紙と木と、微かに蜜蝋の混

ざった、この独特の香り。肺の奥まで満たされていくにつれ、もやもやとしていた気持ちがちが落ちていく。

（……やっぱり図書館にるのが一番落ち着くわね）

鞆から愛読書を取り出して、カウンターの椅子に腰を下ろした。誰も見ていないのをいいことに、両膝を胸の前に引き寄せて、行儀悪く座る。

パラパラとページをめくる。何度も読み返して、背表紙が少しすり減った本。開きたい場面は、もう迷わず開ける。

王子がお姫様の手を取り、月明かりの差し込む回廊で静かに唇を重ねるあの場面。何度読んでもときめきが色褪せることのないそのシーンに、ぎゅつと胸が熱くなった。

「ああ、なんて素敵なきスなのかしら……。お姫様もこんな風に王子様に愛されたら幸せよね……」

物語の中の、山場のシーン。彼女たちの人生の中で、ただ一度だけの本気で特別な恋。やつぱり、何度も恋をしては別れを繰り返すような現実とは、違う。

理想が高すぎると自負はしている。もつと母のように軽やかに、恋への一歩を踏み出せばいいとも思う。だけど、私はやつぱり憧れてしまうのだ。物語のような、唯一無二の、お互いしか必要としない——そんな愛に。

「ほう、こういうのが好きなのか」

「……くっ!?」

耳元で、低い声がした。

私は文字通り飛び上がった。本が手から滑り落ちて、床にバサツと音を立てる。反射的に声の方向から離れようとカウンターに後ろ手をついた——そこで、退路がないことに気づく。

心臓が口から飛び出しそうだった。床に落ちた本をすつと拾い上げる、見慣

れたシルバーの髪。立ち上がったその人の影が、すつと私の上に落ちてくる。

「ステラ、本が落ちたぞ。お前らしくもない」

「……え、あ」

脳は、ショート寸前だった。背中にじわりと汗が滲む。

レオン様は表紙をしばらく眺めてから、ページを開いた。ペラ、ペラ、と本をめくる音が、静かな空間にやけに響いて聞こえる。私は何も言えなくて、彼の伏せられた長いまつ毛だけを見つめていた。

——どれだけ、その時間が続いただろうか。息をするのも忘れて、ただ彼の指先がページをめくるのを見ていた。

レオン様が、ゆっくりと顔をあげる。サファイアの瞳を見つめても、彼が何を考えているのかはわからなかった。

そして大きな一歩でカウンターへと近づいてくる。

大きな窓から差し込む月明かりが、彼の背後から伸びて、私の足元まで長い影を落とした。気づいたときには、私はカウンターと彼の体の間に挟まれていた。右にも左にも、逃げ場がない。本が、カウンターに手をつく私の横にそっと置かれた。

「……ああ姫君。月が美しい夜だ」

「……え」

先ほど、小説で読んだばかりのセリフ。何度も何度も読み返した、あのシーンの一節に、背筋がぞくりと震えた。

節くれだった大きな手が、そつと私の頬に触れた。頬にかかっていた髪を、指先でそつとかき上げられる。それだけなのに、首筋から背中にかけて、ぞくぞくとした何かが這い上がってくる。

「レオンさ……、んッ♡」

唇に、熱くて柔らかい何かが触れた。ちゅ、と音を立ててすぐに離れていく。

（…………え？　今…………）

何が起こったのかわからなくて、目をぱちぱちと瞬かせた。唇に、柔らかな感触と、熱がまだ残っている気がする。

だけど、今起きたことが夢ではないと証明するように、目の前にサファイアの瞳がある。熱を帯びて潤んで、私だけを熱っぽく見つめている。その瞳に射抜かれただけで、下腹部にじわりと熱が集まっていく。

再び近づいてきた唇が、熱っぽい吐息を孕んだ声で、私の名前を呼んだ。

「…………ステラ」

「…………あ。…………んむうッ♡」

唇が再び塞がれる。またすぐに離れるかと思っていたのに、今度の口付けは

なかなか終わらなかった。

それどころか、腰にレオン様の逞しい腕が回され、抱きしめられてしまう。ふわりと鼻腔をくすぐる、彼自身の温かくて男らしい香りに頭がくらくらしてくる。

「……んッ♡ ……んう、んっ♡……ッ♡」

隙間なく密着した唇のせいで、呼吸がうまくできなくなる。息苦しさに耐えかねて、酸素を求めて自然とほんの少し口を開けると、そのタイミングを待っていたかのように、ぬるり♡ とした舌が私の口内に侵入してくる。

「……っ♡!? んんッ♡ んむッ、ん、ふう……ッ♡」

レオン様の舌は縦横無尽に這い回って、歯列をなぞったり、上顎をすりすり♡ と擦ってみたりする。脳の芯がぞくぞくと痺れるような感触に、身体がかつと熱くなる。

（どうしてレオン様とキスなんて……!? でもレオン様の舌、あつつくて柔らかくて……、きもちいい……♡）

どうしてこんなことするんですか、と拒絶しなければならない。だって、私と彼はこんな風にキスをする間柄じゃない。

だけど、そのはずなのに。私の身体は彼に抱きすくめられたまま、その腕の中から逃がれようとは思えなかった。熱いキスに、思考がだんだんと溶けていく。

目尻にじんわりと涙を浮かべながら、私はレオン様の舌の動きに、ただ身を委ねることしかできない。

誰もいない図書館の静謐な空気の中、私の荒くなった呼吸音と、お互いの唾液が絡み合う淫靡な水音だけがやけに生々しく響いている。

やがて息も苦しくなってきた頃、私の口内を味わい尽くしたレオン様が唇を

離すと、私たちの唇の間を銀色の糸がとろお……ッ♡と伸びて、プチン♡と離れた。

「……は、あッ♡ レオン、さま……？♡」

どうして急にこんなことをしたのかと問いただそうとしたけれど、私の口から溢れたのは、覇気がなくて熱に浮かんだような甘ったるい吐息混じりの声だった。

レオン様は私を抱きしめていた腕をほんの少しだけ緩めると、私の目尻に溜まっていた涙を、唇を寄せてちゅう♡と吸い取った。

「……このあと、お姫様は王子様に愛されました、か」

私を抱きしめたまま、レオン様が横目で小説の最後の文章を読み上げる。

「……なあ、ステラ。この小説に書かれている姫は、このあと、どうやって王子に愛されたと思う？」

レオン様の指先が、私の背骨をつつ……ッ♡となぞった。キスに蕩かされた私の身体は、そのわずかな刺激にすら敏感に反応し、腰をびくつかせる。

「そ、れは……」

物語の中におけるお約束。カーテンの締め切られた二人だけの寝所で、身を寄せ合う恋人たち。だけど、物語でも、その先の行為が詳細に描写されることは、決してない。そこから先は、彼女たちしか知らない秘密の時間だ。

こうして彼の腕の中にと、小説の中で感じたものよりもリアルで生々しい感触が伝わってくる。耳元にかかる吐息の熱さ、背中をなぞる彼の手つき、その匂い……。ぞくぞくと這い上がるような甘い痺れに、下腹がひく……。♡と熱くなる。

レオン様は私の身体をひよいと持ち上げると、そのままカウンスターテーブルの上へと腰掛けさせた。急に目線が高くなり、スカートが不躰に捲れ上がる感覚

に、思わず太ももをぎゅつと閉じようとする。けれどその前に、彼の身体が私の太ももの間に滑り込むように距離を詰めてきた。

そのまま、大きな手のひらを私のお腹からゆつくり這い上がらせる。するりと上へ辿ってきた手は、服の上から胸の膨らみを下から包み込むようにしてふに……ッ♡と持ち上げた。

「……ひゃッ!?♡ れ、レオン様……! それは……♡ ああッ♡」

「こうやって……、大切な宝物を壊さないように。ゆつくり、ゆつくり……、まずは胸を優しく揉み解されただろうなあ」

彼の大きな手が私の乳房の柔らかさを確かめるみたいに、下からふに……ッ♡ ふに……ッ♡ と揉んでいく。胸は小さい方ではないと思っていたけれど、彼の大きな手の中にはすつぽりと収まってしまふ。

「お前はずいぶんと着痩せするタイプなんだな。小さいとは思っていなかった

が、なかなか柔らかくて大きい。ずつと揉んでいたくなるな」

「……やッ♡ い、いわないでえ……ッ♡ んんッ♡」

胸を揉みしだいていた手が、やがて、中心でひっそりと硬くなり始めていた突起に触れる。そして、そこを布越しに爪先で引っ掻いた。

——カリッ♡

「……んんッ♡」

鋭い刺激に、思わず腰が揺れてしまう。カリッ♡ カリッ♡ と引っ掻かれるたびに、下腹部がきゅうッ♡ と切なく疼いて、もつともつとと浅ましくねだり始める。

（うう……ッ♡ 胸カリカリきもちいい……、けど……ッ♡ 服の上からじゃ切なくなってくる……ッ♡）

だんだんと与えられる刺激に肉体が馴染んでいくにつれて、私の本能が彼の

大きな手に直接触れられたいと、じくじく疼き始める。

もどかしさに胸の奥が締めつけられて、無意識のうちに早く触れてほしいとおねだりするように、カウンターに両手をついて、ぐっ♡と胸を突き出す格好になってしまう。

「ずいぶんとはしたないお姫様だな？ そんなに胸を突き出して……、俺に押し付けてるのか？」

「……ッ！♡ ちが……ッ」

「恥ずかしがる必要はないさ。好きな人に触れられたいというのは、普通の女の子であろうと、お姫様であろうと同じだもんな」

「……あッ♡」

レオン様は私の服を、インナーごと一気に胸の上までたくしあげる。今まで窮屈そうに布の中に閉じ込められていたおっぱいが、ぷるん♡♡と溢れ出た。

「や、あ……ッ♡」

反射的に両腕を交差させて胸を隠そうとする前に、レオン様が私の手首を掴む。

たわわに実った乳房と、その中央でピンク色に色づいてピンッ♡と上を向いて主張する乳首に、遠慮のない熱い視線を注がれる。耳まで火がつきそうなほど顔が熱くなり、身体が震えた。

「たまらないな……。ピンク色で小さくて、でも触ってほしそうに健気に勃起して……。♡……れろッ♡」

レオン様は先端を硬く尖らせた舌先で、硬くなった乳首を下から上へピンッ♡と弾いた。

「ひゃああんッ♡」

思わずびくッ♡と身体を跳ねさせた私を見て、彼は愉快そうに薄い唇の端

を歪めた。

れろ……ッ♡ れろれろ……ッ♡ れろ……ッ♡

「あッ♡ あう……ッ♡ ん……ッ、んあッ♡」

レオン様の舌が、私の乳首を左右にピンッ♡ ピンッ♡ と弾いたかと思えば、今度は乳輪の輪郭をなぞるように、ゆっくりぐるっ♡ と舐め上げていく。

それだけでも腰が浮いてしまうほど気持ちがいいのに、空いているレオン様の左手が、もう片方の無防備なおっぱいに伸びてきた。

そして、先ほどまで服の上からされていたそれを、今度は剥き出しの突起へとダイレクトに味わされる。

——カリッ♡ カリカリッ♡

「ああッ♡ んう……ッ♡ あッ♡ 乳首カリカリしながら……ッ、おっぱ

い舐めないでえッ♡」

両方のおっぱいに同時に襲いかかる鋭い快楽に、頭がふわっと浮き上がるような錯覚を覚える。腰がビク♡ ビク♡ と揺れて、お股の奥から熱い蜜がじゅわッ♡ と溢れ出した。

「小説のお姫様だって、こんなふうにあざとされたと思うぞ？ 大好きな王子におっぱいを優しく吸われて、乳首カリカリついていじめられて……♡ ……ぢゅるるッ♡」

「あう……ッ♡」

先端を口の中に深く含まれて、そのまま舌先で転がされる。

（そんな……、物語でお姫様がどんな風に触られたのかなんて考えたこともない……ッ♡ こんなえつちなこと——ッ）

物語のお姫様と、目の前の快感がうまく結びつかない。彼の言葉を否定した

かったけれど、脳を灼くような快楽に翻弄されて、まともに考えられなかった。代わりに私の口から溢れ出るのは、ますます甘く、ひどくなつていく嬌声ばかりだ。

「おッ♡ やだやだあ……ッ♡ あ、ああッ♡ 吸うのやあ……ッ♡ や、これだめッ♡ くる……ッ!!♡ きちや、あ、くくく……ッ♡♡♡」

背中が弓なりに反つて、そのままビクンッ♡ ビクンッ♡ と身体を大きく震わせる。下腹部の熱が膨れ上がり、そろそろ……ッ♡ とした蜜が下着をぐつしよりと湿らせていく。

「……は、あッ♡ はー……ッ♡」

大きく上を向いて、荒くなつた呼吸を整える。そつと視線を戻した先に、思つたよりも至近距離にサファイアの瞳があつて、胸がどきりと高鳴つた。

「胸だけでイつたのか？ 感じやすくて可愛い身体なんだな」

「い、言わないでください……♡ ……ッ!?♡」

湿った吐息で囁いたレオン様は、胸からすつと指を滑らせる。降りてきた手は、すではだけかけていたスカートの裾へとそつと忍び込んだ。

熱い指先が柔らかな太もの内側をじつとりと撫で上げていく。

達したばかりの身体がまたふると震える。反射的に足を閉じようとしたけれど、私の太もの間にはすでに彼の逞しい身体が割り込んでいる。抵抗することなんてできなくて、私はされるがままになつてしまう。

そのまま彼の手は、もはや下着の意味をなしていないほど濡ればそつてしまったレースの輪郭をなぞりあげた。

——にちゅり……♡

「あ、や……ッ♡」

いやらしい水音が図書館に響き渡る。恥ずかしさに身をすくめる私を見上げ

て、レオン様が低い声で囁く。

「こんなに下着を濡らして……。これ以上汚れると困るだろう。脱いでしまおうか」

「れ、れおんさま……ッ！ さすがにそれは……」

下着のレースに手をかけたレオン様が動きを止めて、そのサファイアの瞳で私を射抜いた。

「……嫌か？」

「……っ！」

その聞き方は、ずるいと思う。私たちは恋人じゃないのに、とか、あなたの求婚をずっと断り続けているのに、とか。そうやって言いたかったのに、言えなかった。

（……だって、嫌じゃない）

それどころか、この下腹部の熱をどうにかしてほしいとすら願う自分がいる。

そのことが、怖い。

今この瞬間にも、彼に触れられることを切望する身体が、奥からしきりに蜜を吐き出し続けている。

そんな私の逡巡を全部見透かしたように、サファイアの瞳が細められた。

「……あッ♡」

下着の紐にかけられたままだったレオン様の手が、再び動き出す。

するり♡ と下ろされた下着から銀色の糸が引いて、ぷつり♡ と離れた。

てらてらといやらしく濡れているおまんこが、レオン様のサファイアの瞳に映っている。見られてしまうのが恥ずかしくて、足を閉じようとしたけれど、彼の腕はそれを許してくれない。

それどころか、彼は私の太もの間に深く膝をつく、あろうことか、私の秘

部に顔を埋めてきた。彼が何をしようとしているのか気づいた瞬間、さすがに身を引こうとしたけれど、その前に彼の両腕が私を抱き込んで、身動きできなくなつてしまう。

「や……ッ♡　だ、ダメです……ッ!!♡　さすがに、それは……!♡　そんなとこッ、汚いからぁッ♡」

「あー……、たまらないな♡　こんなにいやらしい女の匂いをさせて……。クリトリスももう勃起して皮も剥けてきて……。小さくひくついてて可愛いな」

「あ、やめ……ッ、あぁ……ッ!!♡♡」

——ぢゅうううッ♡♡　ぢゅるるるッ♡　ぢゅるッ♡

言い終えるよりも早く、敏感な突起に勢いよく吸いつかれて、頭が真っ白になつた。

レオン様の薄くて形のよい唇が、上下から私のクリトリスを挟み込んで、ちゅううッ♡ と激しく吸い立てる。直接的な鋭い快楽に、胸を愛撫されていたときよりも遥かに強い痺れが全身を駆け巡った。

「ああッ♡ クリトリス吸わないでッ♡ あ♡ それだめえッ♡ 舌でピンッ♡ ピンッ♡ って弾くのッ、や、あッ♡」

容赦なく突起に吸いつかれたと思ったら、舌先でピンッ♡ と弾かれる。そのたびに腰がびくッ♡ と跳ねて、下腹部が甘くひくつく。膣がぎゅううッ♡ と締まって、再び絶頂の予感が迫り上がってくる。

「……ぢゅるるッ♡ だがクリトリスはびくびく♡ して気持ちよさそうにしてるぞ？ こうして、吸いながら舌で転がしてやると……」

ぢゅるるるるッ♡ れろれろれろッ♡ ピン……ッ♡ ピンピンッ♡

「おッ♡ あ、あ、あゝ……ッ♡ くる、くるくるッ!!♡ あ、あッ♡

——…ッッ!!♡♡」

脳裏で火花が弾け、ビクビクビクッ♡ と大きく腰が跳ね上がる。あまりの快感に生理的な涙が頬を伝ったけれど、それを拭う余裕すらなかった。

膣口がひくつき、しきりにとろり♡ とした蜜を吐き出す。どぷどぷッ♡ と溢れ出したそれは会陰を伝ってテーブルへと溢れていく。

「あー…、こんなに溢れさせて。ナカがひくついて切なそうにしてるなあ♡」

「……ッ♡ そんなっ、こと……♡ ひう♡」

レオン様は熱く潤んだ瞳で、私の目をじつと見つめながら溢れた蜜を指先で掬いあげた。中指でおまんこの入り口をとんとん♡ と優しく叩くと愛液が糸を引いて、にちゃ♡ にちゃ♡ といやらしい音を立てる。

その音に、なけなしの理性が崩れていく。達したばかりの下腹部が、甘く重

く、疼く。

早く、このお腹の奥の熱をどうにかしてほしかった。この熱くて切ないおまんこを、彼のあの太くて長い指でぐちゃぐちゃにかき回されたなら、どれほど気持ちいいだろう——そんな期待で、ナカがじくじくと疼く。

レオン様の中指が、溢れ出た蜜をまぶすように膣口の輪郭をくるくる♡となぞっていく。そのたびに腰がピクン♡と跳ねる。幾度目かのそれに、おまんこの疼きが限界に達したとき。

——ぬぷぷ♡

「あ、ひう……♡」

たつぷりと濡れぼそっていたナカは、なんの抵抗もなく彼の指を奥へと引き込んでいく。待ち望んでいた刺激がようやく訪れて、膣が悦んでぎゅう♡ぎゅう♡とうねって彼の指を締め付ける。

「狭いな……♡ まだ指を入れただけなのに、まんこが離そうとしない。は、持つていかれそうになるな」

ぬぷッ♡ ぬぷッ♡ とレオン様は太くて長い指を、ゆつくりと私のナカに沈めていく。膣襞を一つずつ確かめるように指を入れられると、擦られた場所から熱と快感が膨れあがって、さらに膣を締め上げてしまう。

「んうゝゝ……ッ♡ ん、んあ……♡ ……——ッ!!」

指の腹がそこだけ他とは違うざらざらとした場所をかすめた、その瞬間だった。

「……おッ♡」

脳を直接揺さぶられるような快感に、低くて野太い、自分のものじゃないみたいなきもともない声が漏れ出てしまう。慌てて口を押さえたけれど、レオン様は膣を細めてひどく嬉しそうに私を見つめていた。

「ここだな？ お前の弱いところ……♡」

「アッ♡ そこッ♡ うごかしたら、あッ♡ や、あゝ……ッ♡」

その一点に指の腹で圧をかけるように、ぐッ♡ ぐッ♡ と押されると、重く鋭い快樂が下腹に溜まっていく。膣がぎゅうッ♡ とうねり、もつともつと彼の指をおねだりする。

「気持ちよさそうで可愛いな……。あー……。奥から愛液が溢れてきてる。指を動かすたびにいやらしい音がすごいぞ？」

「やッ♡ 言わないで、えッ♡ んうッ♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこッ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡

クリトリスを吸い立て責められたときのような突き抜ける刺激とは違い、内側からじわじわと理性を溶かされるような、お腹の奥がじんッ♡ と熱くなる重たく甘い快感。身体が快感に耐えかねたように、びくびくッ♡ と小刻みに

震え出す。

やがて、お腹の底から尿意にも似た熱い波がせり上がってくる気配を感じ、本能的な恐怖からぎゅつと膝を閉じようとした。けれど、私の太ももの間にはすでにレオン様の逞しい身体が割り込んで固定されているから、びくともしない。されるがまま、真っ向から快感を受け止めさせられる。

「あッ♡ ちょ……ッ、ま、あッ♡ おッ♡ わらし……ッ♡ しよれ、あ♡
 なんかッ、へんで、え……ッ♡」

ぐちゅぐちゅぐちゅッ♡ ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅッ♡

必死で訴えたけれど、彼は止まるつもりはないようだった。それどころか、むしろ楽しそうに、的確なリズムで私の弱いところを抉っていく。指がナカで掻き回されるたびに蜜口から泡立った真っ白な愛液が溢れ出す。

「あ、あ♡ やあッ♡ ——……ん、おッ!?♡♡」

——ぢゅうううううッ♡♡

突然、再びクリトリスがまた熱い口腔に包まれて、吸い上げられた。

ナカの最も弱いところを指で激しく突き上げられながら、同時に外側の敏感な秘豆を強く吸い上げられる。ナカと外からそんな容赦のない刺激を与えられると、もうダメだった。

「……くくイク、ウ!!♡ イク、イクッ♡ イック……ッ、——……あああッッ!!

♡♡」

ビクビクビクッ♡ ふしやああああッッ♡♡

膣が痙攣し、ナカの彼の指を力強く締め上げる。同時に、お腹の底からさらさらとした熱い液体が、堰を切ったように勢いよく噴き出した。噴き出した潮が、彼の端正な顔や美しいシルバーの髪を濡らしていく。

「——……ああ♡ は、あ……ッ♡ はッ♡ ……ふ♡」

私は荒い息を吐き出しながら、ただ身を震わせることしかできなかった。

恥ずかしいと思う気持ちなんてとうに吹き飛んでしまつて、自分の潮を滴らせたレオン様の艶っぽい顔から目が離せない。

彼の大きな手が、濡れて額に張り付いた髪を掻き上げる。その色っぽさに、ドクンと心臓が鳴った。

——そのとき。

ドサツ、と重い音が書棚の方から響いて、張り詰めていた空気がぷつりと切れた。

「ぎやつ!」

「……なんの音だろうな。ちよつと見てくるから待っててくれ」

レオン様は名残惜しそうに私から身を離すと、物音がした書棚の方へと向かつていった。その背中が見えなくなつたのを確認してから、私はそつと大きく息

を吐き出した。

乱れた服をなんとか整えて、自分を抱きしめるように両腕を胸の前でぎゅつと交差させる。

——まだ身体の芯が、熱い。

今さっきまで起こっていたことが信じられなくて、へなへなとカウンターの陰に座り込む。

（わ、私ったら……。レオン様と何をしていたの……。？）

なぜ、彼とあんなことになってしまったんだろう。引き返そうと思えば、引き返すタイミングなんていくらでもあったはずだった。

だけど、私は拒めなかった。——いや、拒まなかったのだ。

物語の世界の恋愛にばかり浸っていて、現実の誰にも触れられたいだなんて思ったことはなかった。そういう相手が、自分にできるとも思ってたなかった。

でも、あの瞬間だけは。彼に触れられたと思ってしまっていた自分がいた。

脳裏に、私を熱っぽく見つめるサファイアの瞳が鮮明に浮かぶ。あの瞳を見ていると、自分の全てを曝け出したいような、もっと深くまで入り込んでほしいような、そんな甘い渇きにも似た渴望が胸の内を支配する。

（ああ、ダメね。頭がごちゃごちゃ……）

何度も絶頂した直後の、甘い気だるさに包まれた身体ではちつとも考えがまとまらない。

再び自分の身をぎゅつと抱きしめると、こちらに近づいてくる足音が聞こえた。

「……ステラ？」

カウンターの物陰に隠れていたせいで見えなかったのだろう、レオン様が私を

呼ぶ声がした。

「だつ、大丈夫でしたかっ？」

平静を装おうとしたのに、声が裏返ってしまった。レオン様はカウンターを回り込み、座り込んでいる私を見つけると、そつとしゃがみ込んだ。

「ああ、本が一冊落ちただけだった」

「そうだったんですね」

「……なあ、ステラ」

「はい……？」

サファイアの瞳が、真っ直ぐに私を見つめている。静かで真剣な眼差しに目を奪われていると、やがて、その瞳が柔らかく細められた。

「今度、デートしないか」

「……へ？」

思わず間の抜けた声が出た。

（でーと、って。……あのデート、よね？）

今起きたことと、その言葉が、頭の中でうまく繋がらない。何度も瞬きをしながら彼を見つめると、レオン様はゆっくり続きを語り出した。

「お前が恋愛小説を好きだということは、今日まで知らなかった。いつも図書館で手に取るのは冒険譚や硬派な文学小説ばかりだったからな。……俺はまだ、お前のことを何も知らないんだと思った」

「それは……。まあ、そうですね」

膝の上でぎゅっと握り込んでいた手を、レオン様の大きな手ですっぽりと包み込まれる。彼の手は、私の手と同じくらい熱かった。

「毎回、開口一番で求婚するというのも少し強引だったと思い直したんだ。俺は、お前のことをもっと知りたいし、お前にも俺のことをもっと知ってほし

い」

（……レオン様を、知る）

今の言葉が領主としての彼ではなく、もっとパーソナルな部分を指しているのはわかる。でも、ただ——。

「ですが、レオン様——」

「——嫌では、なかったんだよね？」

私の曖昧な言葉は、レオン様によつて強引に封じ込められる。

彼の熱い手が、私の手を強く握り込んだ。視線を逸らそうにも、私を見つめるそのサファイアの瞳から、なぜか目が離せない。

「……わかりました」

気づいたら、そう言っていた。いつもの求婚だったなら、嫌ですと明確に言っていたのに。

——今夜はなぜか、嫌だとは言えなかった。



数日後、私は待ち合わせの噴水広場へと向かっていた。

まともに誰かとデートするなんて、いつぶりだろう。少なくとも大人になってからは記憶にない。

53

何を着ていけいいかまったく見当がつかなくて、前日に思い切って仕立て屋の扉を叩いた。店主のおすすめに従って選んだのは、淡く青みがかったワンピースだ。普段の仕事着よりずっと柔らかくひらひらとしたもので、着ているとなんだかそわそわしてしまう。鏡の前で三回確認して、それでもまだ落ち着かないまま家を出た。

(……どうしてこんなに緊張するのかしら)

いつもより早鐘を打つ心臓を押さえつけるように、胸の前にぎゅつと手を当てる。

ただ街を歩くだけだ。自分にそう言い聞かせてみても、胸のドキドキは全然収まってくれない。

広場に着くと、子どもたちの笑い声が噴水の水音に混じって聞こえてきた。

縁石に腰掛けて、フードを目深に被った人物がいる。領主様が変装して人混みに紛れているのだから、なるべく目立たないようにしているのだろう。近づいていくと、フードの端から一房の銀色の髪がこぼれ落ちて、サファイアの瞳がこちらを向いた。

(今日の服装、変だと思われるかしら？ やっぱりこんな淡いワンピース、私には似合わないかも……)

そんな不安が一瞬頭をよぎったけれど、それを打ち消すように前髪をそつと整えた。

「……お待たせしました」

「ちつとも待っていないさ。ここは賑やかだからな、人々の様子を見ていたら飽きない」

レオン様は目を細めて、広場をゆつくりと見渡した。噴水のそばで転んだ子どもを抱き上げる父親、荷物を抱えて笑い合う女性たち、屋台の前で迷いながら財布を開く老人。何気ない、けれど穏やかな日常の光景だ。

（この方が守ってきたものが、ここにある）

日々の仕事の積み重ねが、こうして人々の暮らしになって根付いている。その横顔に、胸がとくとんと高鳴った気がして、私はそつと視線を逸らした。きつと、久しぶりのデートという非日常に、気持ちが浮き足立っているだけだ。相

手はいつもと同じレオン様だし、私だっけいつもと同じ私でしかない。

「では行こうか、ステラ」

レオン様が立ち上がると、すらりとした影が私の足元まで伸びてきた。そして、大きな手がすつと差し出される。

「……っ」

私はその手を取るのを躊躇っていると、「ん？」という穏やかな声とともに、もう一度手が差し伸べられた。急かすわけでも、引つ込めるわけでもなく、差し出したまま。私が自分から手を取るのを、待っている。

ちらりと顔を見上げると、にこりと微笑まれてしまった。

（……もう！ 繋げばいいんでしょう、繋げば！）

赤くなっている顔を見られないように、そつぽを向きながら勢いよく大きな手を掴む。レオン様はそんな私を愉快そうに眺めながら、その大きな手がそつ

と、しかしきつちりと私の手を握り込んだ。

「今日の服、とてもよく似合っている。俺の瞳の色と揃いだな」

顔を寄せながら囁かれる。もう一段体温が上がった気がする。

服装を褒めてくれたことは嬉しかったけれど、彼の瞳の色なんて意識してなかった。無意識に彼のことを考えながら選んでしまったような、多少の居心地の悪さを感じてしまう。

手を繋ぎながら、二人で街の中を歩いていく。「どこに行きたい？」と問われたので、素直に古書店と答えた。初めてのデートの行き先としてはもう少し洒落た場所を言うべきだったとも思っただけ、レオン様は「ああ、いいな」と即座に頷いてくれた。

人通りの多い大通りを外れ、石畳の細い路地を曲がる。古びた木の看板が下がった一軒の店の前で立ち止まった。レオン様が扉を押さえてくれたので「ありがとうございます」と言つて店内に入る。中に入つた瞬間、古い紙と革と埃が混ざり合つた、独特の匂いが鼻腔をくすぐつた。

（……ふふつ、やつぱりわくわくするわね。この匂い）

ぎつしりと積まれた書棚の列を目で追つてみると、奥のカウンターで新聞を広げていた白髪の店主がちらりと顔を上げ、また紙面に目を戻した。この少し淡泊な感じが古書店らしくて、いい。

「自由に見てくるといい。俺も適当に見て回るから」

逸る心を抑えていたつもりだったが、レオン様にはお見通しだったらしい。彼は穏やかに私に笑いかけた。

「わかりました。では、遠慮なく」

初めてのデートなのにこれでいいのかな、という戸惑いもあったけれど、目の前に広がる圧倒的な蔵書量に、次第に興味が吸い寄せられる。

好きな作家の棚から始めて、タイトルの気になるものを背表紙で確かめて、状態のいい版の値をざっと確認して。図書館の蔵書は幅広く揃っているけれど、絶版になったものや初期の版は古書店にしかない。何が眠っているかわからない、その不確かさが、来るたびに私をわくわくさせる。

棚と棚の間を移動しながら、背表紙を指でなぞっていたとき。

(……あ、これ!!)

思わず声が出そうになるのを飲み込んだ。棚の奥に、薄いくすんだ緑の背表紙が見える。

それは、好きな作家のデビュー作だった。有名な代表作より前に出た最初の一冊で、すぐに版が少なくなつて、今ではほとんど流通していない。図書館に

も所蔵はなく、存在は知っていても現物を見たのは初めてだった。

恐る恐る手に取り、その色褪せた表紙をそつとなぞる。そのときちょうど、後ろから声をかけられた。

「何かいいものが見つかったのか？」

「そうなんですよ！」

私はその表紙をレオン様に見せた。笑みを抑えられないまま、それでも声だけは潜めてひそひそと話し出す。

「これ、私が好きな作家のいちばん最初の作品で、代表作の前に一度だけ出てそのままほとんど増刷されなかったんです。図書館にも入ってなくて、現物があるとは思ってなかったの……！」

そこまで言ったところで、喋りすぎたと気づいて急いで口をつぐむ。恐る恐るレオン様の顔を伺うと、うつすらと目元を和らげて、こちらを見つめていた。

その慈しむような、眩しいものを見るような視線に、耳が熱くなる。

「……す、すみません。つい、話しすぎてしまつて」

「いや？ 本に夢中なお前を見るのは、楽しい」

そう言つて、レオン様はほんの少し目を細めた。それから、一瞬だけ話すのをためらつたような間の後、穏やかに続ける。

「……図書館を建てたときには、まさかこんな優秀な司書が来てくれるとは思つていなかった。優秀なだけではなく、真面目でいつもひたむきで。本を愛する心を、子どもにも大人にも分け隔てなく伝えてくれる」

「レオン様……？」

思いがけない言葉に、私は瞬きをした。私を見つめるサファイアの瞳は、どこか愛おしむような光をたたえていた。

「本と向き合つてるときの、夢中で楽しそうなお前の表情からずっと目が離せ

ない」

「……っ！」

「だから求婚を断られても、何度でも図書館に足を運んでしまうんだ」

その優しい眼差しに耐えかねて、視線を手元の本に落とした。きつとレオン様の瞳には、耳まで真っ赤になった私が映っていることだろう。

(……そんなふうに、思ってくれていたのね)

温かな気持ちの胸の奥までじんわり広がっていく。なんて返していいのか、言葉が全く出てこない。

レオン様は喉の奥で小さく笑うと、俯いている私に、一度だけそつと触れるように頭を撫でた。

「店主、すまない。この本をもらえるか」

私が言葉を探しているうちに、レオン様は私の手から本をすりと取り上げ

てカウンターへ向かった。慌てて後を追おうとしたが、私が口を挟む前に、気づいたときにはもう会計が終わっていた。

「受け取ってくれ」

戻ってきたレオン様が、本を差し出してくれる。

「……いいんですか？」

「今日はデートだからな。その代わり、読み終わったら俺にも貸してくれ」

「わかりました」

気を遣わせないのが上手な人だと思う。だけど、私の好きな恋愛小説を、彼も読むのだと思うと、なんだか胸の奥がむずむずとする。

「せっかくだ。さっきの話の続きを聞かせてくれないか。お前の好きな本の話をもっと聞きたい」

広場に出店が並んでいることは、来る途中に見えていた。二人でそちらへ向

かいながら、私はまた少し喋りすぎてしまった。

屋台で揚げ菓子を一つずつ買つて、広場のベンチに並んで座る。砂糖をまぶした熱い生地を一口食べた瞬間、思わず声が漏れた。

「ん〜！ すつごく美味しい……！ 外がさくつとしてて、中がふわつとして……」

「……そうだな」

につこりと微笑むと、なぜかすつと視線を逸らされてしまう。軽く咳払いした彼の頬はうつすらと赤くなっていた。

（どうしたのかしら）

天気の良いか、とも思つたけれど、今日はそれほど暑くない。

軽く身を乗り出して彼の目線を追いかけると、また逸らされてしまう。いつも私ばかりが照れさせられているので、なんだか新鮮だ。

（なんだか珍しいものを見た気分だわ……）

いつも余裕があつて、どこか一歩引いたところから視野広く物事を見ているような人なのに。そういう顔もするのか、と思うと、うまく言葉にならない感覚が胸の中で膨らんだ。

そのとき、広場の向こうから元気な声が飛んできた。

「あつ、レオンさまだー！」

子どもの声だった。振り向くと、五、六歳くらいの男の子が駆けてきて、レオン様のフードを引っ張った。ひらりとフードが落ちて、銀色の髪と端正な顔が日の光の下にさらされる。

レオン様は少年のそんな行動に怒るでもなく、むしろいつもよりも優しい笑み

を浮かべた。

「ああ、トーマスカ。元気にしていたか？」

「うん！ お母さんのお腹の赤ちゃん、もうすぐ生まれるって！」

「そうか、それはよかった。お前がしっかり見ていてやれよ」

「もちろん！ 僕、お兄ちゃんになるんだから！」

遠くで、母親らしき大きなお腹の女性が恐縮したように頭を下げていた。子どもが満足そうに駆け戻っていくのを見送ってから、ふと気づくと周囲にいた人々がちらちらとこちらに目を向けていた。

気まずそうにするでもなく、遠慮がちなながらも温かい視線だ。会釈をする人、小さく手を振る人。レオン様はそれを一つひとつ、自然な笑顔で受け取っていた。

「はは、バレてしまったな」

レオン様はいたずらがバレた子どもみたいに、カラツと笑った。あたたかな陽の光に、彼のシルバーの髪色が反射しているのが、やけに綺麗だなと思った。

広場での時間は、思っていたよりずっと長くなった。

子どもたちが輪になって遊び始めたのに気がついたのはレオン様で、気づけば私たちも混ざっていた。石蹴りの審判をやらされたり、花冠の作り方を教わったり。領主様が地面に膝をついて子どもと目線を合わせているのを、通りがかった街の大人たちが目を細めながら眺めていた。

夕暮れが広場を橙色に染め始めた頃、レオン様が子どもたちを帰し始めた。それぞれの名前を呼んで、家の方角を確かめて、一人ずつ送り出していく。最後の一人が角を曲がつて見えなくなると、広場には静けさが戻ってきた。

「もうすっかりこんな時間になってしまったな。そろそろ飯にするか」

「ふふ、そうですね。お腹がすきました」

どちらともなく手を繋いで、私たちは歩き出した。

大通りを外れ、石畳の路地へと入る。夕日に引き伸ばされた二人分の影が、石畳の上をゆっくり滑っていく。話しながら歩いているうちに、気づけばすっかり日は落ちて、路地には薄い藍色が広がっていた。

連れて行かれたのは、その路地の奥にある小さな店だった。木の扉を押すと、磨き込まれたカウンターと、低く落とされた照明が目に入る。棚にずらりと並んだボトルたちが、蠟燭の光をそれぞれ静かに反射していた。厨房からは何か煮込んでいるような、食欲をそそるいい匂いがする。

「乾杯！」

二人でグラスを合わせると、チリン、と小気味よい音が鳴る。一口含むと、果実のような甘みが最初に来て、後からじんわりと熱が喉を下りていった。

「美味しい……。普段お酒ってあんまり飲まないもので、こういう味は初めてで」
「俺は会食やらなんやらで飲まされることが多いからな。……だけど、今日の酒はいつもよりずつと美味しい」

綺麗な顔でこちらを見ながらそう言うので、なんだか落ち着かない気持ちになる。言外に私と飲む酒が美味しいと言っているのだと気がついて、嬉しいと感じてしまった。

私を見つめるその視線に耐えかねて、もう一度お酒を口に含んだ。歩き疲れた体にお酒がゆつくりと染み渡っていく。

一つ息を吐いて、ちらりと横目でレオン様を見た。口角をわずかにあげてお

酒を口にするその姿は、昼間よりもさらに肩の力が抜けているように見えた。

今の彼は、領主としての彼ではなく、ただのレオン様なのだと、そう思った。

そんな彼と、肩と肩が触れそうな距離で、並んでお酒を飲んでいる。そのことが不思議で、だけどなんだか嬉しかった。

つまみの小皿をいくつもらいながら、他愛のない話をたくさんした。図書館では本の話ばかりだったから、そうでない話をするのが新鮮だった。

いつかレオン様が訪れたという遠い土地の話、ここ数年で土の質がよくなつて見事な作物が取れるようになったと教えてくれた隣の席の老農夫、カウンターの端でずっと無言で飲んでいたのにふとこちらを振り返って「領主様、橋の修理の件は助かりました」と言い残して帰っていった赤ら顔の男。

途中、騎士団の詰め所から来たらしい数人がレオン様に声をかけてきた。

「おや、今日はお一人じゃないんですね」と言つて私に向けた目が意味深で、レ

オン様が「また今度な」と短く切り上げてくれたとき、なぜか私の方が恥ずかしかった。

「よし、それじゃあそろそろ行くか」

カラン、と空のグラスがテーブルの上に置かれた。何杯目かのお酒も、おつまみも、全てなくなってしまった。

「……あ、もうこんな時間なんですね」

レオン様と話をしていると、時間が経つのがあつという間に感じる。名残惜しい、と思ったのが声に出してしまった気がして、慌てて咳払いで誤魔化した。お酒が少し入っているせいか、いつもより口が緩い。

彼はさつと店主に数枚の札を置くと、「行こう」と言いながら自然に私の手を取った。

今日一日で、彼と手を繋ぐのが自然になってしまった。それを当たり前のよう

に受け入れてしまっている自分にも、少し驚く。

夜風が、熱くなつた頬を心地よく冷ましていく。

昼間は人であふれていた石畳の道が、今は二人分の足音だけを響かせている。閑散としているというよりは、穏やかな静けさだ。

レオン様も、もう夜だからとフードを被つていなかった。街灯の明かりが、レオン様の銀色の髪をうつすらと縁取つていた。

私は久しぶりのお酒にほんの少し足元が覚束なくなりながら、繋がれた手を頼りに隣を歩く。

（こうしてるとまるで……）

——普通の恋人同士みたい、と素直に思つてしまった。こんなふうには誰かと

並んで歩く日が来るなんて、少し前の私には想像もできなかったのに。

いつも、仕事帰りに送ると言われるたびに断り続けてきた。でも、もし断らずにいたら、こんな空気だったんだろうか。——いや、きっと違う。

今日、この一日がこんなにも楽しくて、彼の色んな表情を見ることができたからこそ、そう思うんだろう。今日のレオン様の顔は、いつもとは違うものばかりだった。古書店で私の話を嬉しそうに聞いてくれた優しい顔も、子どもたちの石蹴りを笑いながら見ていた顔も、頬を赤くして視線を逸らした顔も、穏やかにお酒を飲む顔も——。

（……帰りたくないな）

お酒のせいも相まってか、離れがたく思ってしまう。先ほどもではあんなに会話も弾んでいたのに。今は私とレオン様、どちらとも言葉を発さなかった。

言葉少なに歩いているうちに、いつの間にか家の前まで着いてしまった。ぴ

たりと、ドアの前で足が止まる。

(……ああ、この温もりを手放したくない)

普段なら絶対に抱かない感情が、するりと浮かんできてしまった。自分でも少し驚きながら、けれどそれは消えてくれない。

手を離して、今日はありがとうございましたってお礼を言って、家に入らなければ。そう思うのに、私は動けない。

横から、熱い視線を注がれているのがわかる。きっと、私と彼は今同じことを考えている。だからこそ、顔をあげるのが怖かった。

(だって、だって……)

でも、私はその視線に、顔を上げずにはいられない。顔をあげる。

「……あ」

いつもは涼やかなサファイアの瞳が、真っ直ぐに私を見つめていた。熱を帯

びた、知っているのに知らない顔で。その視線に絡め取られて、動けなくなる。

繋いでいた手をそつと引き寄せられて、一瞬だけ、唇に柔らかい熱が触れた。それだけで終わらず、そのまま腕の中に引き込まれる。レオン様の、革と微かに漂う彼自身の香りに包まれて、頭がくらくらする。

私は彼に何も約束できないのに。この先のことも、何も。

物語よりも心惹かれる恋、そんなものが存在するはずがない。現実の恋はきつと、そんなに甘くない。——私は、進むのが怖いのだ。

「いいか？」

低い声が耳元で囁いた。その声に、あの日の夜の記憶が蘇って、下腹が重たく疼く。

「……っ」

彼のことが好きかどうかもわからないまま、ただ頷いた。

私は、きつとずるい女だ。答えも出せないくせに、離れたくないという気持ちだけは本物で、それに甘えてしまうのだから。

慣れ親しんだドアが閉まると同時に、玄関横の壁に背中が押し当てられる。

レオン様の大きな影が上から降ってきて、顎をぐいと持ち上げられたかと思えば、次の瞬間には唇が重なっていた。

「……んッ♡」

「ステラ……。ん……」

薄く口を開けると、すぐに酒の香りとともに彼の舌が私の口内に侵入してきた。お酒の混じった熱い吐息と、お互いの唾液が混じり合う。

もつと、もつと深くとも言うように、レオン様の長い腕が私の腰を絡め取る。

「……んうッ♡ んッ、ふ、う……ッ♡ んむッ、ちゅ……ッ♡」

ぴったりと隙間なく身体が密着し、キスも深まっていく。濃厚な口付けに、頭の芯が蕩けて、膝の力が抜けてしまいそうだった。

崩れ落ちてしまいそうな身体を支えるために、ぐつと背伸びをして彼の太い首へと腕を回し、すぎるようにしがみつく。

(……あ♡ これ……ッ♡)

抱き合っている身体の間、ちょうど私のお腹の下あたりに、何か硬くて熱いものが当たっている。服越しでも伝わってくる圧倒的な存在感と質量に、くらくらしてくる。彼もこのキスに興奮しているのだと思うと、言いようもない何かがぞくぞくと迫り上がってくる。

「……んッ♡ ん、ちゅ……ッ♡ ……くちゅ、んう……♡」

彼の分厚い舌が、私の口内を這い回る。その動きに合わせるように私からもおずおずと舌を絡めると、彼の屹立がドクンッ♡ と脈打った。

そして、そのまま舌先がレオン様の熱い口内に吸い込まれて、ちゅこ♡ ちゅこ♡ と揺すられる。

「ちゅ……ッ♡ んむッ、は、あ……ッ♡ ん、ふ……ッ♡ ……——ッ♡」

キスに夢中になっていると、彼の膝頭がぐりッ♡ と私の股の間に入り込んできた。

そのままワンピース越しに、すでに硬く尖っていた肉芽を押し潰される。直接的な鋭い快楽に、腰がびくッ♡ と大きく跳ねる。

「んああッ♡ あ、んうう……ッ♡ ん、ふうッ♡」

キスの快感も相まって腰が甘く揺らめき、まるで自分から彼の膝にクリトリスを擦りつけるような、はしたない格好になってしまう。恥ずかしくて顔が燃えそうなほど熱くなるのに、あまりの気持ちよさに、どうしても身体を離すことができない。

熱くなった下腹部からどぶどぶッ♡ と蜜が溢れ出して、下着を濡らしていく。膝でぐり♡ ぐり♡ と擦られていくたびに、にちゅ♡ にちゅ♡ といやらしい水音が狭い玄関に響いてしまう。

「……は、あつ。もうこんなに濡らして。音、すごいことになってるぞ？」

「……っ♡ い、いわないでえ……ッ♡ あ、んんッ♡」

レオン様の大きな手が、私の太ももを下からするり♡ と撫で上げた。そのままショーツのゴムに手をかけられる。

「……あッ♡」

止める間もなく、ずるッ♡と勢いよく足首まで引きずり下ろされてしまう。ちらりと見えたショーツのクロッチ部分は愛液をたっぷり♡と吸って、すっぴん色が変わってしまっていた。

外気に晒されて心許なくなつた割れ目を、レオン様の指が直接撫でていく。

「ああ……ッ♡ や、あ……ッ♡」

「キスだけでもこんなに感じるんだな。……可愛い」

レオン様は私の頭頂部に軽い口付けを落とした。そのまま、溢れ出た愛液をおまんこにまぶすように、にゆる♡ にゆる♡ と前後にストロークされると、早くその指でナカを満たしてほしいと言わんばかりに、膣口がきゅううッ♡ と切なく締まって、また蜜を吐き出した。

それがまた潤滑剤になって、指の動きはさらに滑らかさを増していく。愛液をたっぷりと纏わせた彼の指が、クリトリスから膣口まで、前後にぐच्चゅ

♡ ぐっちゅ♡ と激しく往復し始めた。

「んん……ッ！♡ れおんさ、まあ……ッ♡ んあッ♡ ……ぐっおッ♡」

「あー……、クリトリスもすごい主張してるな。もうこんなに勃起させて。俺に気持ちよくしてほしいってアピールできて偉いなあ♡」

——ぐりいッ♡

「んおおッ!?♡」

今度は親指の腹で突起をぎゅッ♡ と押し潰されて、あられもない声が漏れ出してしまう。脳裏でぱちぱち♡ と火花が弾ける。膝でぐりぐりされるのとは比べものにならないくらい、大きくて鋭い快感が私の脳を灼いていく。

そのまま、親指の腹でクリトリスの皮を優しく剥き上げ、露出した敏感な裏筋のあたりをにちゅッ♡ にちゅッ♡ と指先で細かく擦り上げられれば、もうひとたまりもなかった。

私から溢れ出た大量の蜜が潤滑剤となつて、クリトリスの快感を何倍にも増幅させていく。

「んあぁッ♡ あッ♡ クリしゅごいいいッ♡♡ しよれッ♡ すぐにきちやうよおッ♡」

膝がガクガクと震え、立っているのもやつとだった。私は彼の腕に必死にしがみつき、体重を預ける。下腹部が引き攣り、絶頂の波が押し寄せる。

「アッ♡ ゴシゴシしないでえッ♡ おおッ♡ ……ッッ!!♡♡」

息を詰めながら、腰をガクガクッ♡ と一際激しく震わせる。熱くなった下腹からピュッ♡ と潮が吹き出して、床にポタポタッ♡ と落ちていった。力が抜けて座り込みそうになった私の身体を、逞しい腕が抱き止めてくれた。

（酔ってるからかしら……ッ?♡ なんだかこの前より……ッ♡）

「クリトリスだけでこんなに感じるとはな……。前より感度が上がったんじや

ないか？ ナカまで触ったらどうなるんだろなあ？」

レオン様の指が、蜜口をくるくる♡ といったずらになぞる。すでに快感に蕩かされたおまんこは、ぐつしよりと蜜を滴らせて潤んでいた。

「あッ♡ ひう……ッ♡」

熱い指が、蜜口にあてがわれた。そのまま彼がつぶッ♡ と指を沈めていくと、くぶぶ……ッ♡ となんの抵抗もなく彼の中指がナカに飲み込まれていく。膣が彼の指を悦ぶようにぎゅううッ♡ とうねり、奥へ奥へと指を引き入れようと波打った。

「あつつくて狭いな……。すごいうねって、俺の指を離さないように締め付けてきてる」

密着したお腹の下には、なおも熱を帯びた彼の屹立が押し当てられていて、布越しでもドクン♡ ドクン♡ と今にもはち切れそうに猛々しく脈打っている

るのがはつきりと伝わってきた。

(もし、もし……♡ これが挿入したら、どうなっちゃうんだろう……?♡)

熱に浮かされた頭で、そんなことを想像してしまう。指を挿れられただけでこんな気持ちがいいのに、この大きなモノで奥まで貫かれたら――。

――トンッ♡

「んおお……ッ!?♡」

レオン様の長い指が、コリッ♡ とした膣の行き止まりを捉えた。脳の芯がじんっ♡ と痺れるような重たく深い快感に身を震わせる。

「あー……、すごいな。ポルチオもしつかり感じられるんだな。もう子宮が降りてきてる。ほら、ここの奥、トントンッ♡ って突いてやると、ナカがぎゅうッ♡ って締まって……。また溢れてくる」

「……あッ!?♡ しょこ、おッ♡ なんか変になるッ♡ あ、あ♡ ん

お……ッ!!♡」

トントン……ッ♡ トントンッ♡ ぐちゅッ♡ ぐちゅッ♡

指の腹で、子宮の入り口を優しく、けれど奥まで圧を伝えるように深く押し込まれ、全身に甘く重たい痺れが走った。

クリトリスを責められたときみたいな突き抜ける鋭い快感とはまた違う、身体の芯までとろとろに溶かされてしまいそうな、甘く深い快感が全身を支配していく。

「あ……ッ♡ お、くばつか、あッ♡ ぐう……ッ♡ ……んおおッ!♡♡」

そこへ追いうちをかけるように、彼の親指の腹が、硬く尖ったクリトリスを再び上から強く押し潰した。

ぐりいッ♡♡ ぐちゅぐちゅッ♡♡ ぐちゅぐちゅッ♡♡

ナカと外から同時に、ベクトルの違う快感を叩き込まれて、脳裏で激しく火花が散る。もう自分の足では立っていられず、レオン様の胸に完全にしなだれかかる格好のまま、彼の服をぎゅうつと掴んだ。

「おおッ♡　くるッ♡　くるう……ッ♡　またきぢや、ううッ♡　らめッ♡　もッ、らめえ……ッ♡♡」

先ほどよりも遙かに大きな絶頂の予感に、恐怖すら湧き上がる。熱くなった目頭から生理的な涙がこぼれ、頬を伝った。

「あー……、可愛い。このままイクといい。ちゃんと支えててやるから」

「あ、ぐ……ッ♡」

レオン様の胸元に顔を埋めた私の頭上に、そつと優しい唇が落とされる。

私を熱っぽく愛おしげに見つめるその視線に、意識がふわりと溶けていく。

そんな幸せに胸を高揚させたまま、私は――。

「イック♡♡ おお~~~~~………ッ!!♡♡ ~~~~~ッ♡♡」

ビクビクビクッ♡ ふしゃあああああッ♡♡

激しく身体を痙攣させながら、さつきよりも大量の潮を撒き散らした。勢いよく噴き出したそれは、私のワンピースだけではなく、ぎゅつとしがみついたレオン様の服までをぐつしよりと色濃く濡らしていく。

「……はッ、あ♡♡ はー………ッ♡♡ ん、ふ………ッ♡♡」

さすがにもう、指一本すら動かす力が残っていないかった。レオン様に完全にもたれかかり、私はただただ荒い呼吸を繰り返す。

そんな私を、彼は愛おしそうにしつかりと抱きしめてくれて、熱い身体同士が密着した。

どちらともなく見つめ合う。彼の瞳には、先ほどよりもずっと濃い情欲が滲んでいる。きつと、私も同じ目をしてしまっているんだろう。

「ステラ……」

熱い唇が、一瞬だけ唇に触れた。そして、彼は私の膝裏に腕を回すと、軽々と私を抱き上げた。

（お、お姫様抱っこ……）

——まるで、小説の中のお姫様みたい。

そんな甘やかな気持ちに浸っていると、レオン様は私を胸にしつかりと抱きしめたまま、ベッドへと迷いなく足を進めていった。